

著者の旅の曲

着地する浦島太郎

Tanaka Machi

文・写真：田中 真知 イラスト：bozen

【プロフィール】1960年東京生まれ。作

家・翻訳家。1990年よ

り1997年までエジプト

在住。著書に『アフリカ

旅物語』（北東部編・中

南部編、凱風社）、『ある

夜、ピラミッドで』（旅行

人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻

印』（凱風社）、『惑星の暗号』（翔泳社）など。



八年

のエジプト暮らしを終えて、日本に引き上げてき

てしばらくは霧の中を歩いているような気分が抜けなかった。生活のためにやらずにはならないことが津波のように押し寄せてきているのに、困ったことに頭がほとんど働かないのだ。

とくに参ったのが情報の多さである。情報とは、いつてみれば世界の中で自分の位置を確かめる手段であったはずだ。世界はどんなところで、自分はその中のどこにいて、どこにこういうところにいるのか。情報は、その手がかりを与えてくれるものだと思っていた。

ところが、日本をかけたぐつている情報というのは、どうもそうではないように思えてならなかった。情報にさらされればさらされるほど、自分の位置がわからなくなり、深い霧の中に迷い込んでいく気がしてくるのだ。しかも、情報の消費のスピードがあまりにも速くて、情報をささえるリアリティの重みがまるで感じられない。

そんな話を知人になると「浦島太郎状態だな」といわれたものだ。それは竜宮城から現実世界に戻ってきたという意味なのだろう。けれども、ぼくにはとてもそうは思えなかった。むしろ逆だった。

現実世界だと思っていた日本のほうこそ、竜宮城のようなリアリティのない世界としか感じられなかった。

とはいっても、生きていくためには、この竜宮城的な希薄なリアリティを、ひとつの現実として受け入れていかななくてはならない。旅に飛び出すことよりも、このような現実への着地のほうが、じつははるかに困難であることを思い知ったものだ。

その後、しばらくしてモンゴルを訪れたとき、自分とは逆の立場ながら、同じく現実への「着地」を考えさせられたことがあった。

ビャンバはウランバートルの大学で国際協力を学ぶ十九歳のモンゴル人青年だった。彼が一般のモンゴル人どちがつていたことは、親の仕事の関係で、小学校高学年から高校卒業までの九年間を日本の仙台で暮らしたことだった。人生のほぼ半分を日本で過ごした彼は、当然、日本語はペラペラ。アメリカンスクールにも通っていたので、英語もお手のものだった。

九年ぶりにモンゴルに帰国したビャンバは、大学に通いながら夏休みには旅行者を案内するアルバイトをした。ぼくと

知り合ったのもそんなときで、いつしよに都会から離れた草原に暮らす遊牧民の住まいを訪ねることになった。

ビャンバと話していると、妙な錯覚に襲われた。彼は言葉づかひも感覚も日本の若者そのものなので、モンゴル人とモンゴルを旅している気がしない。学校生活の話、日本の芸能界の話、バイトの話、女の子の話。その話の内容と、あまりにかけ離れた目の前の大草原。多感な青春を日本で過ごした彼に、九年ぶりのモンゴルはどう映ったのだろうか。

「カルチャーショックだったよ」とビャンバはいった。

「なにが？」

「なにかもが？」

「もう慣れた？」

「いや、まだ慣れないよ」

ビャンバがとまどったのは、ほかでもない。遊牧民としての伝統や規範が濃密に生きている社会に生きることの息苦しさだ。男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだ、年長者にはこう接しなくてはいけない、年少者にはこうふるまわなくてはならない。たとえウランバートルのような都会に住んでも、そうした目に見えない規範が人間関係を細かく規制していた。それは窮屈であるばかりか、

モンゴルの草原と遊牧民の移動式天幕ゲル。どこまでも広がる緑の草原にあって、ゲルの白い色はひとときまぶしい



強迫観念のようにビャンバをさいなんだ。彼もまた浦島太郎だった。

それでもビャンバは、そんなモンゴル人の生き方を大切にしようとしていた。聡明な彼は日本で味わった過度な放縱や、情報の洪水のもたらす倦怠や無力感も知っていた。そこに陥らないためには、誇りを持てるような伝統や規範をもつことの大切さもわかっていた。幸い、この国にはそれが残っていた。だから遊牧民のテントを訪れると、彼は強い焼酎のグラスをすすめられるままに何杯も飲み干し、屈強な遊牧民の若者と相撲もとり、馬で草原をかけまわった。

「ぼくは自分がモンゴル人であることを思い出そうとしているんだ」

そう口にするビャンバを、すこし羨ましく思った。

夜、遊牧民の天幕で、ビャンバに通訳してもらいながら主人に話を聞いた。

「遊牧民にとって、なにがいちばんだいじなことでしょう？」とぼくは主人に訊いた。

主人はしばらく考えてから、ぼつりと口を開いた。

「歌です」

「どんなときに、歌うんですか」

「いつでも、どんなときでも、私たちは

歌います」

「歌っていただけですか」ぼくは口を開いた。

主人は低い声でこぶしをきかせてうなるように歌った。日本の民謡のようだった。歌い終わると、主人は、いまのは母のことをうたった歌ですといった。

「日本では、みなどのくらい両親を尊敬していますか？」主人がいった。

「はっ？」ぼくはビャンバに訊きかえした。

「日本人はどのくらい父母のことを尊敬しているかって訊いてます」

「すごい質問だな……どのくらいって、あまり尊敬なんてしてないんじゃないかな」

「わたしは両親が大好きです。だれよりも尊敬しています。親や家族や友人をだいにすることはモンゴル人の誇りです」四〇歳を過ぎている主人は悪びれず口を開いた。

天幕にいた一同が、そのとおりだといふようにうなずいた。こういう世界が、ここにはまだ生きているのだ。

ビャンバがかすかに笑った。ロウソクの暗い明かりの下で、その顔は誇らしげでありながら、どこかほんの少し寂しげうにも見えた。